

ウィリアム・ケントリッジ 見るものと視ることについて

3217359 端地 美鈴

▼プロフィール

ウィリアム・ケントリッジ (William Kentridge)

1955 年、アパルトヘイト時代の南アフリカにユダヤ系として生まれ育つ。ヨハネスブルグ在住。1980 年代末から、木炭やパステルで描いたドローイングを部分的に描き直しながら、その変化をコマ撮りする手法を用いた、「動くドローイング」と呼ばれるアニメーション・フィルムで国際的に知られる。人形劇やオペラの舞台監督、俳優、演出家、著述家など多彩な分野でも活躍している。

【日本での展示】

2009~2010 年

東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、広島現代美術館にて「ウィリアム・ケントリッジ-歩きながら歴史を考える そしてドローイングは動きはじめた....」開催

2014 年

京都の元・立誠小学校講堂にて、パラソフィア京都国際現代芸術祭 2015 プレイメントとしてビデオインスタレーション「時間の抵抗」を展示

2015 年

京都市美術館にて、パラソフィア京都国際現代芸術祭 2015 に「セカンドハンド・リーディング」(2013)と、その製作過程でつくられたドローイングを出展

▼ウィリアム・ケントリッジ-歩きながら歴史を考える (2009~2010 年)

私が初めてウィリアム・ケントリッジの作品に出会ったのは、2009 年に京都国立近代美術館で開催された「ウィリアム・ケントリッジ-歩きながら歴史を考える そしてドローイングは動きはじめた....」である。日本で初の大規模な個展となった今回の展示では、フィルム・インスタレーション 4 点を含む 19 点の映像作品と、36 点のドローイング、63 点の版画作品が展示された。

ケントリッジの作品は南アフリカの歴史と社会状況を色濃く反映している。自国のアパルトヘイトの歴史を主題としているものが多く、南アフリカやアパルトヘイトの歴史的背景についての予備知識が無ければ難解な部分もある。暴力的な場面や薄暗い画面からか、共に鑑賞した知人は恐怖を感じていた。南アフリカやアパルトヘイトとは遠く離れた日本という場所で、なぜ多くの鑑賞者を魅了させたのか。流れるように動く素晴らしいドローイング技術はもちろんのこと、鑑賞者は他の何に魅かれていくのかという疑問が残った。

展示の大部分を占める「プロジェクションのための9つのドローイング」(映像作品9点、計60分程)では、複数のスクリーンで1~3作品が一度に上映され、ワイヤレスヘッドホンを着用した鑑賞者がスクリーン前の床に座り、作品を見終わると別のスクリーンへと移動する光景が広がっていた。

この作品では9つの映像全てに、ソーホー・エクスタインと呼ばれる1人の冴えない風貌の中年男性が登場する。アパルトヘイト時代における南アフリカの鉱山所有者であるソーホーが、鉱山での採掘の厳しい労働条件、責任感や罪悪感、ビジネスでの苦悩と恋愛問題を抱きながら、自己を分裂させていく様子が描かれる。ケントリッジによるドローイングの繰り返しと、消しきれなかったドローイングの消し跡の蓄積により、鑑賞者はソーホー自身の歴史を部分的に見ているような感覚となる。そして、鑑賞者は1つのスクリーンでの上映を見終わると次のスクリーンへと移動する。

作品を更に深く理解したければ、その場に留まることも可能だ。そうした、個人の理解に合わせた自由度の高い鑑賞方法は、流れる歴史を「見る」ことだけではなく、歴史を「視る」ということにも一役買っているように思われる。



↑スクリーンの前で鑑賞する来場者



↑「重大な傷/病の歴史について」より一部抜粋 (1996)



↑「ステレオスコープ」より一部抜粋 (1990)

その先の「やがて来たるもの(それはすでに来た)」(映像作品8分40秒)は、天井から円形のアナモルフォーシス(歪像)をテーブルに投影し、その映像を中央の円筒鏡に鏡像(正像)として鑑賞する特殊な作品である。この作品で重要なことは、テーブル上での歪像と円筒鏡で修正された正像という2種類の映像が、同時に鑑賞

者の視野に入り、一度に「見る」ことである。鑑賞者は移動しながら観測点を定め、どちらの映像を選び取るかを含めた個人的な判断を経て、この作品の全体像を作り上げなければならない。ケントリッジは制作過程でのカメラとドローイングの間を往復する膨大な歩行の重要性を何度も書籍で強調している(ドローイングの一部を描き直し、少し離れた所に設置したカメラまで歩き撮影するという作業を繰り返すため)が、この作品において、鑑賞者もケントリッジの身体的な制作過程を追体験するかのようになり、歩きながら考えることを強いられていく。



↑「やがて来たるもの(それはすでに来た)」の展示



↑展示のためのドローイング

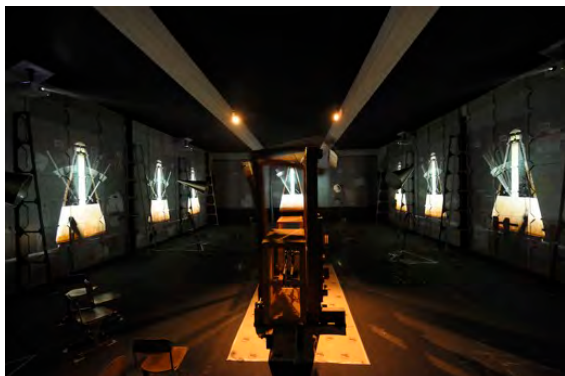
このように、ケントリッジの作品展示では鑑賞者に対し「見る」だけでなく「視る」ことも念頭に置いた空間が設計される。元・立誠小学校で開催された「時間の抵抗」では、更にそれが加速する。

▼「時間の抵抗」(2014 年)

「時間の抵抗」は、パラソフィア京都国際現代芸術祭 2015 プレイベントとして元・立誠小学校講堂にて上映されたビデオインスタレーション作品である(映像作品 約 30 分)。会場には、壁面 3 辺を埋める 5 つのスクリーンと、4 つの巨大なメガフォンが配置され、各スクリーンには「時間」をテーマに制作された映像が映し出されていた。会場内にはメガホンから大音量のサウンドが鳴り響いており、会場の中央では「呼吸する機械」と名付けられた木製の可動式装置が一定のリズムで作動音を刻みながら動き続けていたのが印象に残っている。

20 世紀初頭の近代物理学の誕生を研究するハーバード大学の科学史家ピーター・ギャリソンとケントリッジとの時間を巡る対話から着想され、南アフリカの女性ダンサー、ダダ・マシロとのワークショップの過程で生み出されたというこの作品は、今までの展示作品と比較すると、ケントリッジによるアニメーション場面は少なくはあったが、ケントリッジのインスタレーション作品として集大成とさえも思わせる迫力があつた。

映像の終盤では労働者や農民と思われる人たちの黒い影が現れ、5つのスクリーンをまたいで一方方向へと列を成し鑑賞者を取り囲むように歩いていく。「呼吸する機会」が刻む作動音と、影たちの歩くテンポは、この流れには決して抗えないような一定のリズムを刻み、その様子を眺める鑑賞者は、自身も展示会場の一部であるかのような感覚にとらわれる。人間が定義した時間の規則や拘束から逃れようにも逃れられない時間への抵抗を「視る」ことになるのである。



↑「時間の抵抗」展示風景

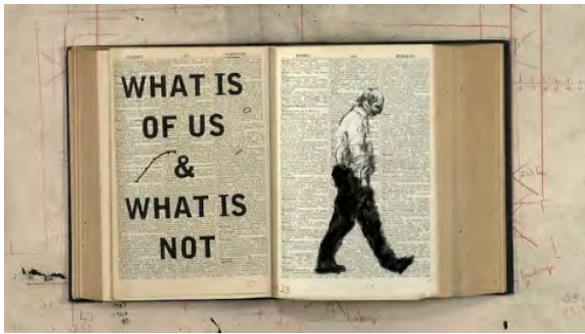


↑「時間の抵抗」より一部抜粋 行進する人々

▼「セカンドハンド・リーディング」(2015年)

パラソフィア京都国際現代芸術祭 2015 にて展示されたこの作品(映像作品 約7分)は、一冊の辞書のページに直接描かれたドローイングで構成されている。本のページをめくっていく運動を利用してドローイングが動き出す。辞書に掲載されている言葉の羅列に物語性は無いが、ページ上でケントリッジの肖像画にも見える人物が歩き、考え込むかのように立ち止まったり、椅子を乗り越えながらも歩き続ける様子は、思考をめぐるせながら読む行為そのものを表しているようにも見える。ドローイングと共に表れる文章は脈絡もなく、ケントリッジが辞書から読み取った言葉なのか、または、ケントリッジ自身が歩きながら考え続けている物事のようにも感じられ、文章をどのように理解するかは鑑賞者に委ねられている。鑑賞者が読み進めるうちに自身の頭の中で、記憶や経験と、その文章とをつなげることにより「セカンドハンド」(二次的/中古)となる。

今回は今までの展示方法とは大きく異なり、壁面1辺のみに映像が投影され、鑑賞者は本を読むように作品前の椅子に座り映像を鑑賞する。一方方向にめくり進められるページは、時々、記憶を遡り思考を確認するかのように逆方向へもめくられ、ドローイングが歩く方向も逆方向になる。鑑賞者自身に動きは伴わなくとも、本を読む運動を用いて「読む」ことの二次的な感覚や曖昧さを「視る」ことができる。



↑「セカンドハンド・リーディング」から抜粋



↑展示風景。作品の前には椅子だけが置かれている。

ケントリッジ は書籍で、「全ての人は自分自身のプロジェクターを持つ」と述べている。

これは人間の眼をカメラ(外部からの光の受信装置)としてだけではなく、マジック・ランタン(幻灯機=外部への投影装置)として捉えたためであるが、眼から外部のスクリーンへ投影することは、見えるものそのままを受け入れ投影するような受動的な行為ではなく、私たちが認識しようとする世界、すなわち自身が行う「視る」という能動的で身体的な行為を示していると考えられている。

「見えるものを見ることと、知っているものを視ることとの間のこの移行こそが、美術家や映画監督が扱う領域であると私には思える」というもうひとつのケントリッジ の言葉と、彼が残してきたこれらの必然的な展示方法も含めた作品から、鑑賞者に「視る」ことを体験させることは、目の前で見えているものと、自身に取り込まれ視えているものの違いを示唆し、それらが彼の作品に魅了させられるひとつの要因でもあると考えられる。

参考資料

- ・書籍「ウィリアム・ケントリッジ 歩きながら歴史を考える そしてドローイングは動き始めた...」
- ・DVD「ウィリアム・ケントリッジの謎」
- ・http://www.parasophia.jp/artists/william_kentridge/
- ・http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200910120100.html
- ・<http://www.kansaiartbeat.com/kablog/entries.ja/2014/03/nw.html>